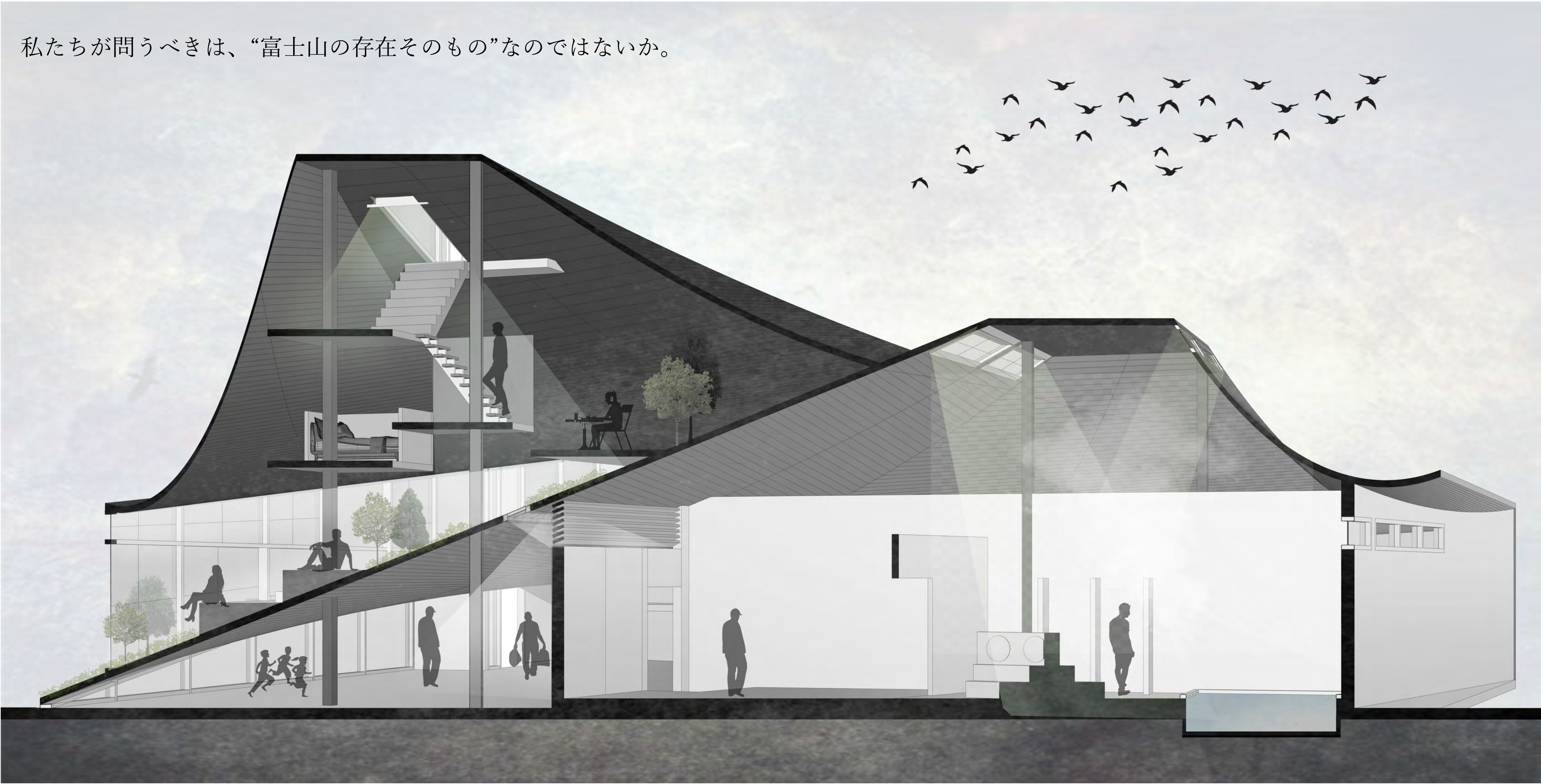


富嶽湯景

- 稜線に託す継承のかたち -

私たちが問うべきは、“富士山の存在そのもの”なのではないか。



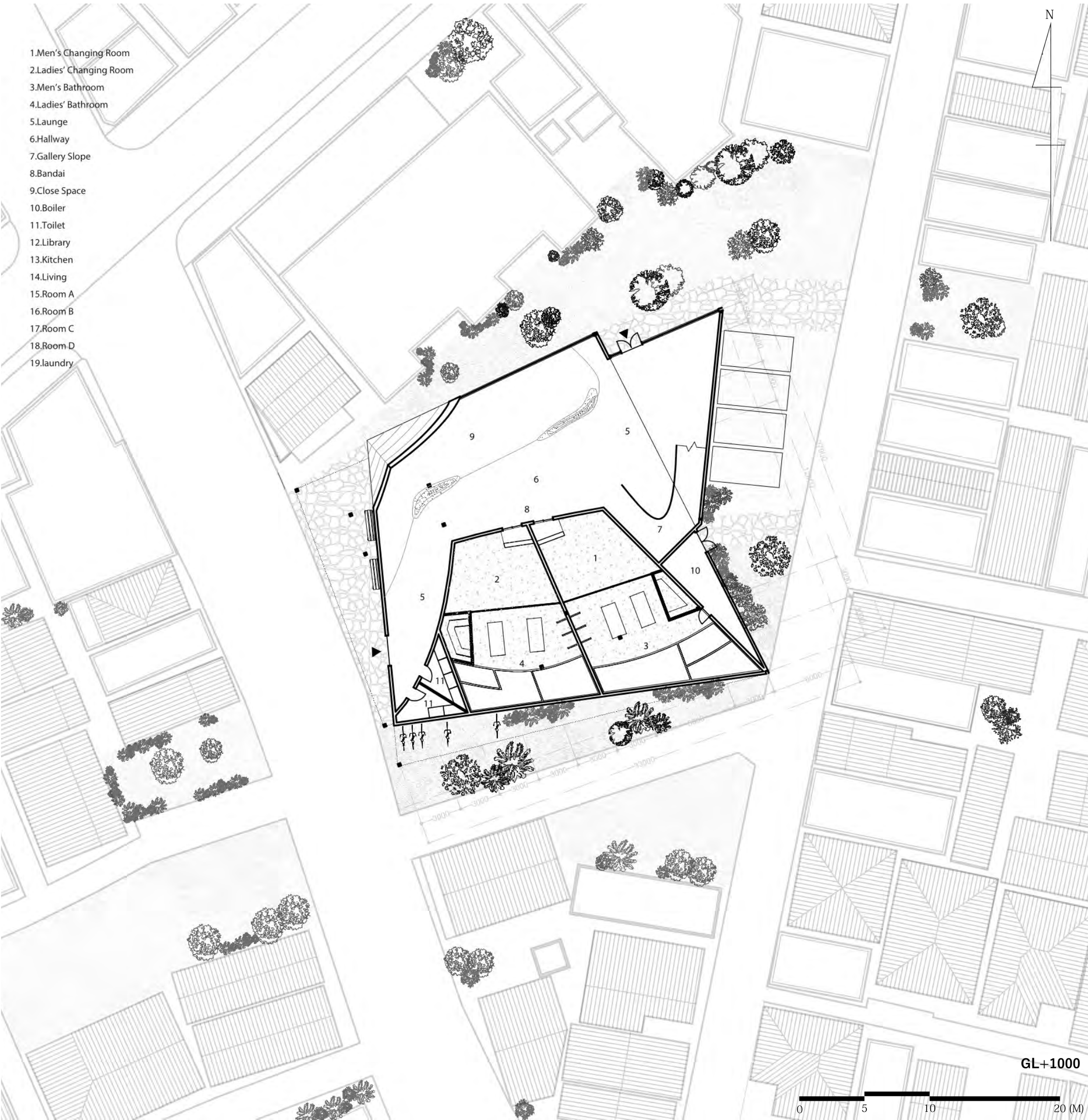
Phase.01: 銭湯における富士の存在

古代から国を守り鎮める神として信仰されてきた富士山。時代が進むにつれ、旅の目的地や形式として、形状的な美しさに対する評価が加わり、富岳三十六景など多くの文学・美術作品に富士山が取り上げられた。富士講と呼ばれる富士山を信仰する宗教が江戸時代に流行し、昭和初期まで続いた。昭和になり出現した銭湯の壁に富士山を描くことが人気になったのも信仰心が関係関係している。富士山は時代を越えて、表現の中に繰り返し現れる。それは、常に“そこにあるもの”として、人々の心の奥に静かに宿ってきた証ではないか。現代になり、銭湯文化がなくなりつつあるなか、同時に我々日本人の心に居続ける富士の絵もなくなろうとしている。しかし私たちにとって富士山は見るだけではなく心で仰ぐ風景でもある。見えないが、そこにある。そんな“背中の山”の気配を、この建築にそっと沈ませた。

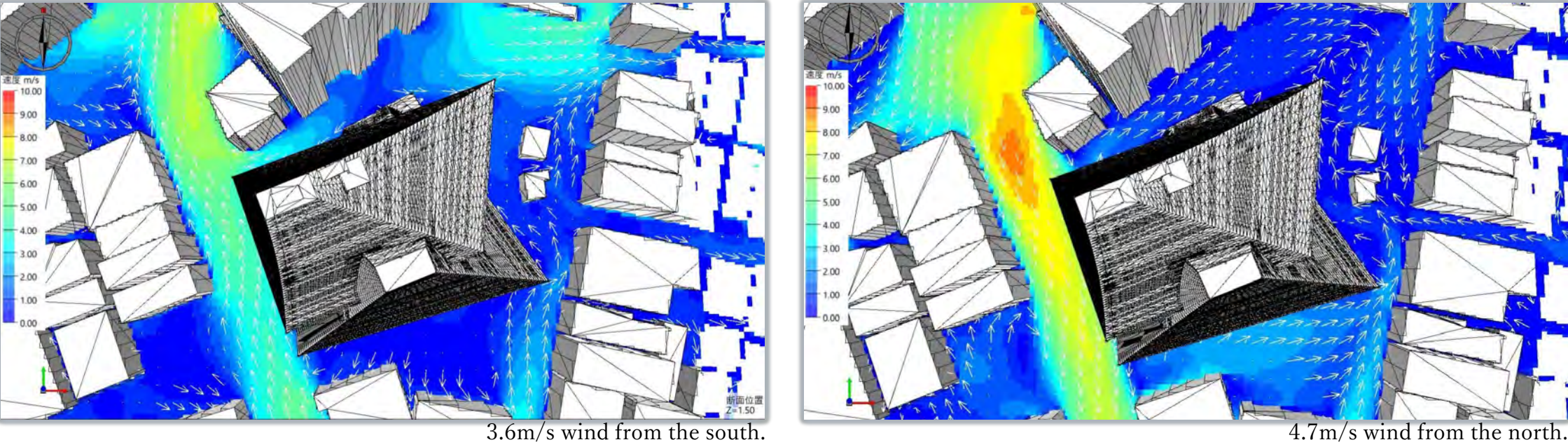
Phase.02: 関東に根付く銭湯文化

銭湯の壁の富士山の始まりは、キカイ湯という銭湯で、子供たちを喜ばせるために壁画を描くことになり、その際の画家が静岡県出身であることもあり、故郷でよくみられる富士の姿を描いたものだった。縁起がいい富士山のペンキ絵は次第に周辺の銭湯に広まっていく。

Phase.04: 設計



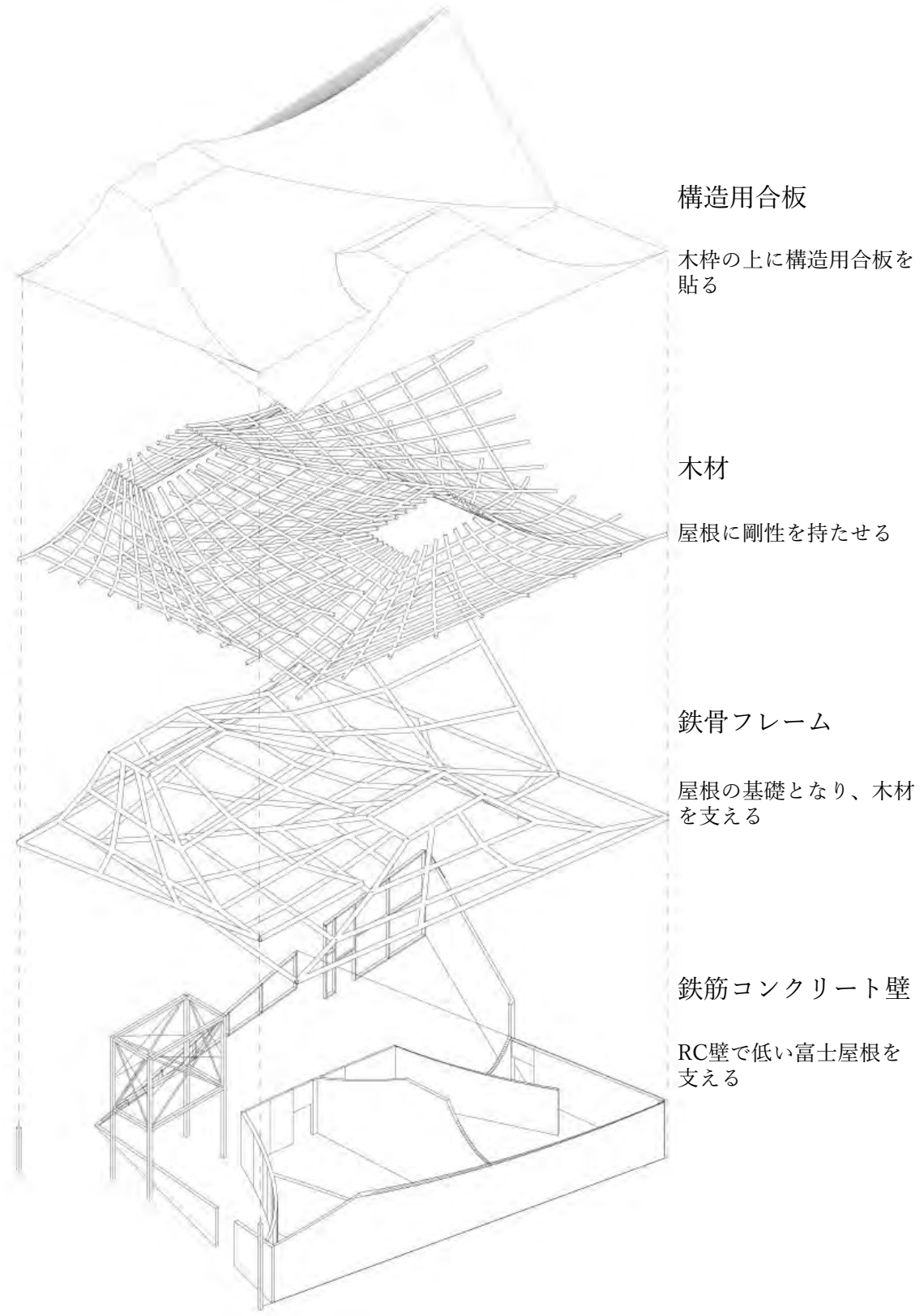
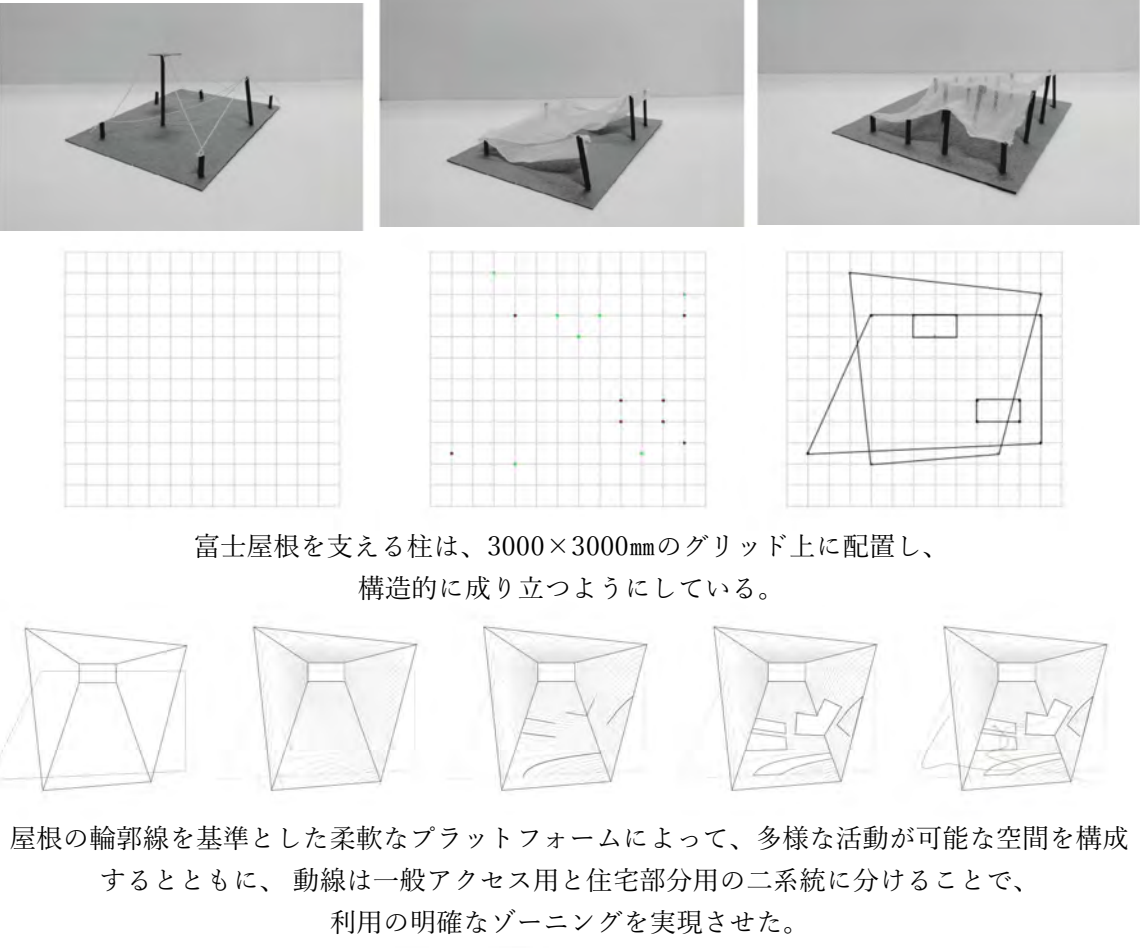
Phase.03: 敷地解析

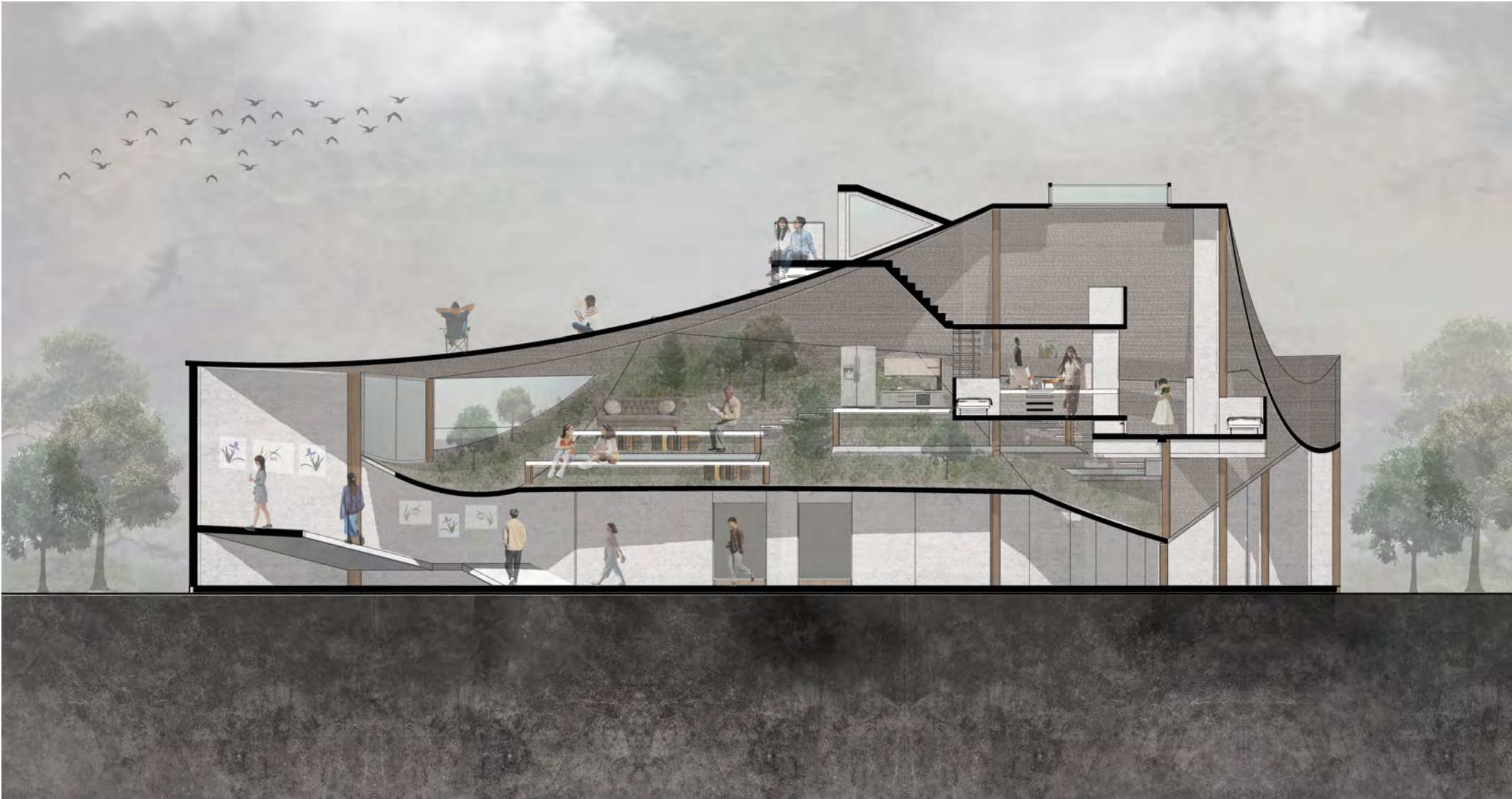


夏季は南～南東からの暖かく穏やかな風が吹き、南からの風が銭湯の西側の道路に沿って強く吹き込む。また、北側の建物の影響により、南から吹く風は反転し、温かい北風となって公園と銭湯を南へ抜ける。冬季は北北西から冷たく乾いた風がよく吹き、北風が道路に流れ込み、建物南側や北側の空間にはあまり風が入らなくなる。

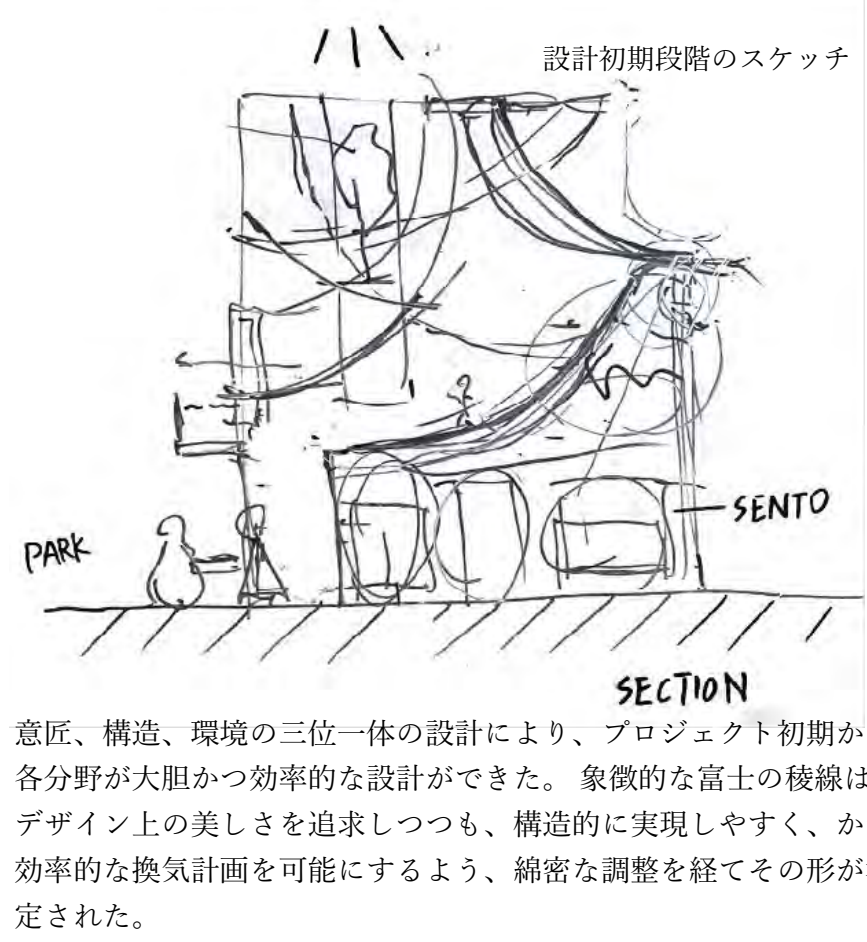
Phase.05: 稜線から描かれた構造

まず富士山の稜線をイメージし、カテナリー曲線を複数重ね合わせ、その中から2本の曲線を選定した。ゾーニングは、山を登るような体験を空間に重ねることで構成されている。

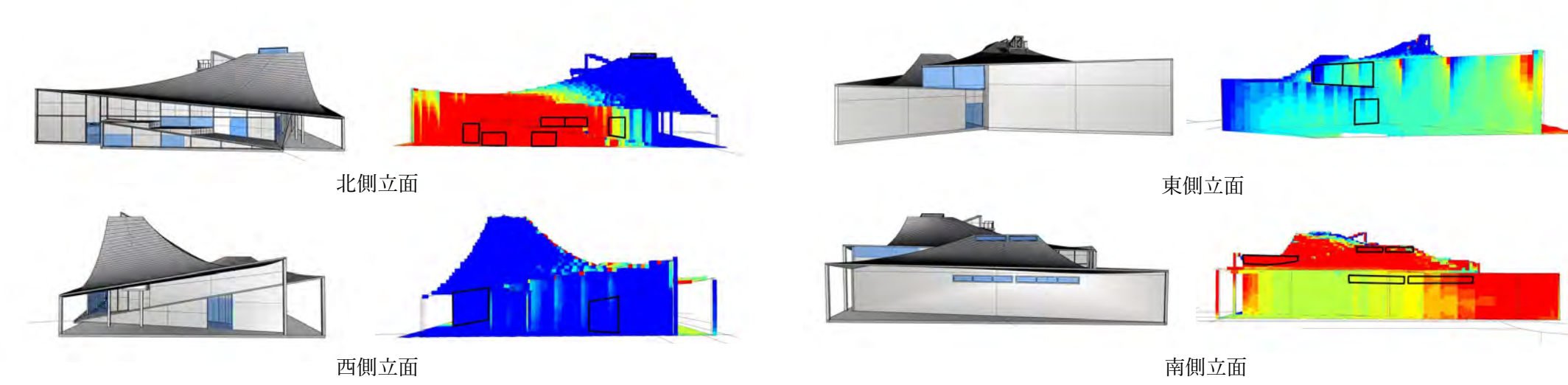




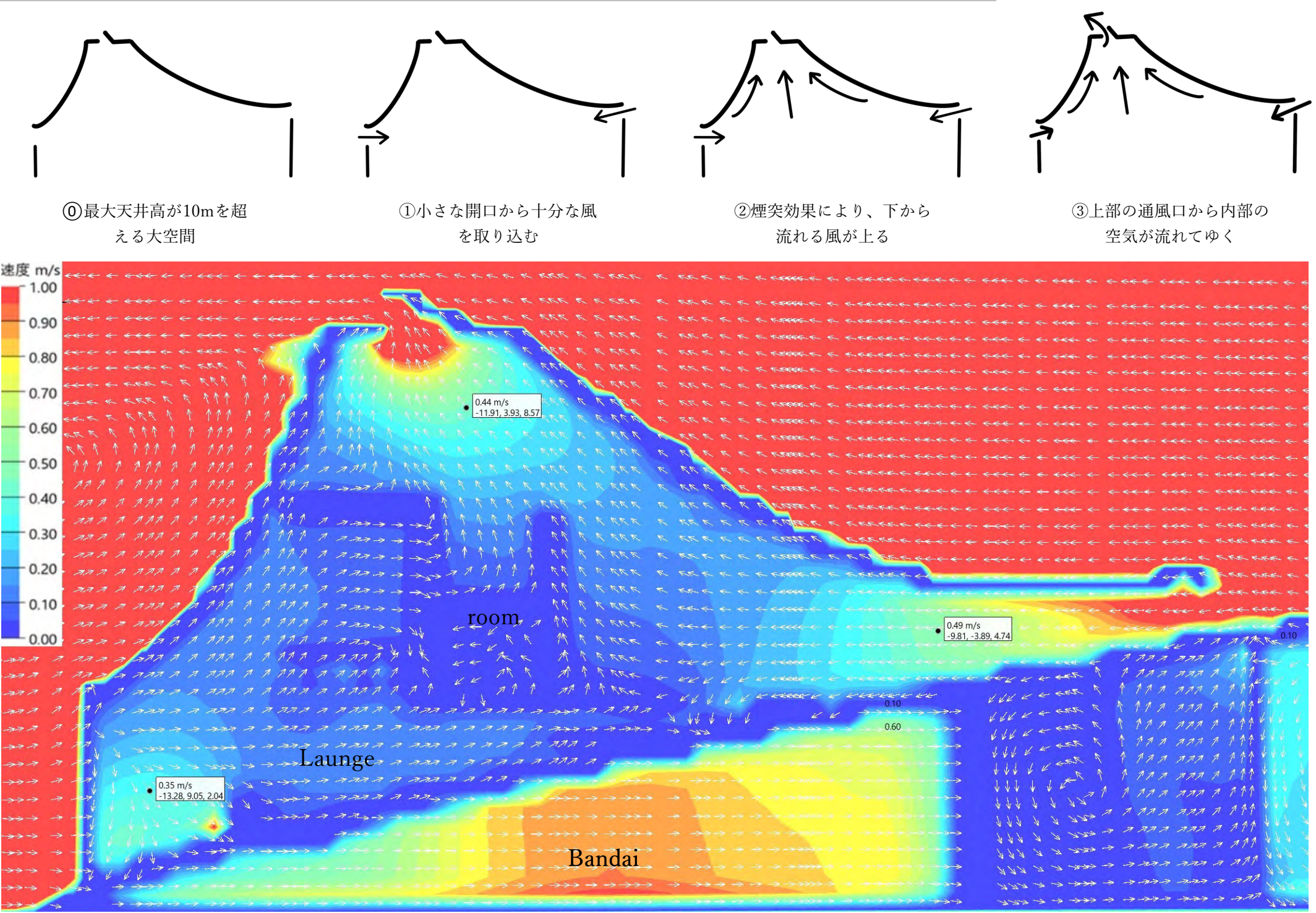
Phase.06: 設計プロセス



Phase.08: 開口部検討

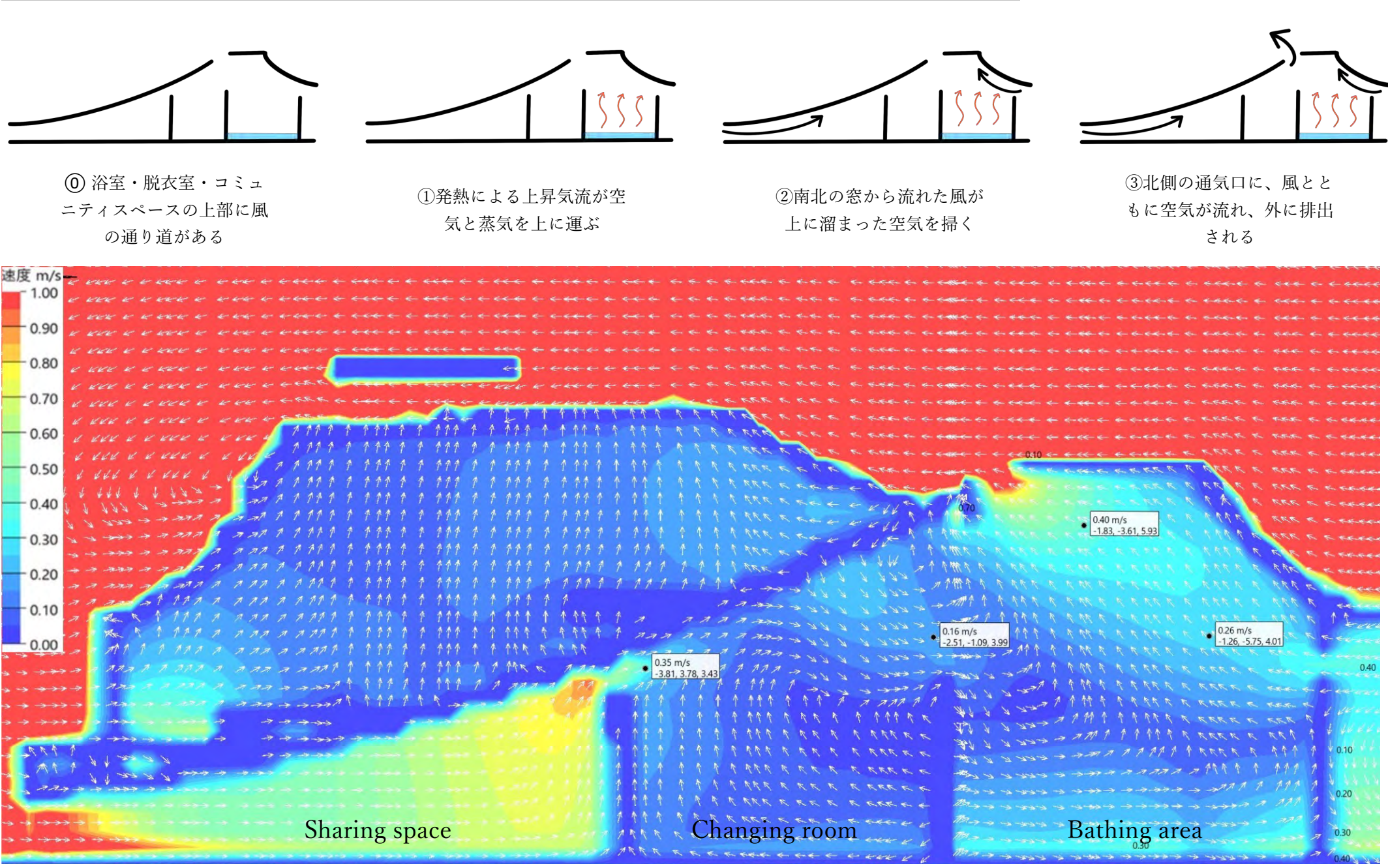


Phase.09: ベンチュリー効果と煙突効果を組み合わせた換気計画の検討結果



この空間では、ベンチュリー効果によって小さい開口部からでも十分な通風量を確保し、さらに、窓の高低差を利用した煙突効果が自然な空気の流れをつくり出し、大空間全体の換気を可能とする。

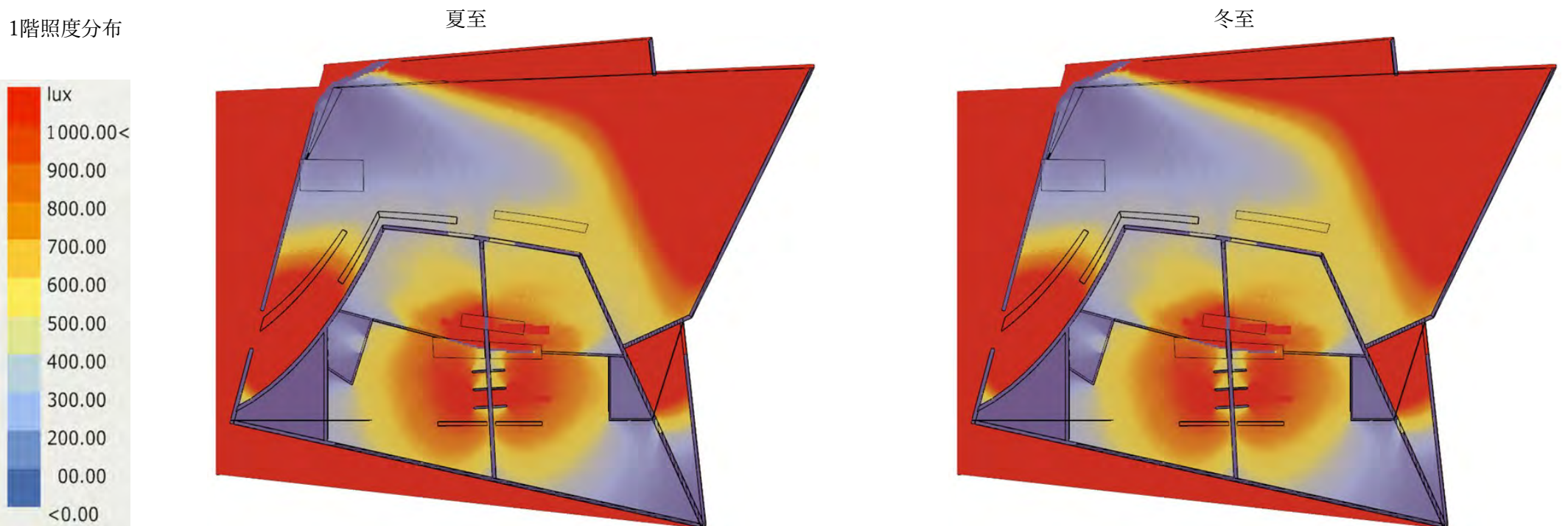
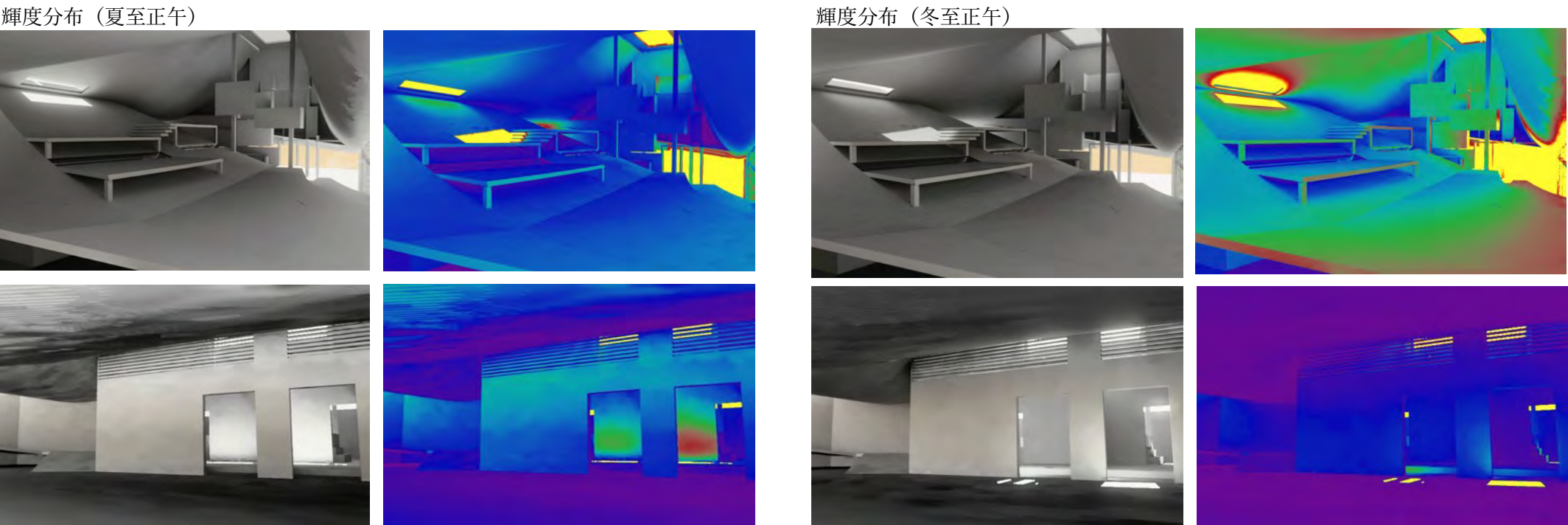
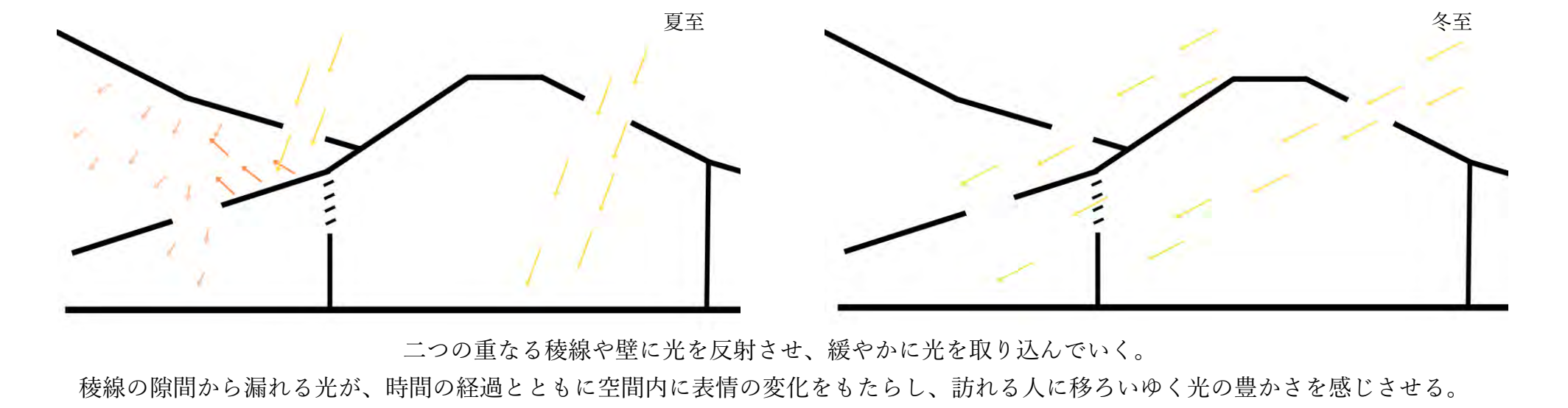
Phase.10: 上昇気流と温度差による気流を利用した浴室の換気計画の検討



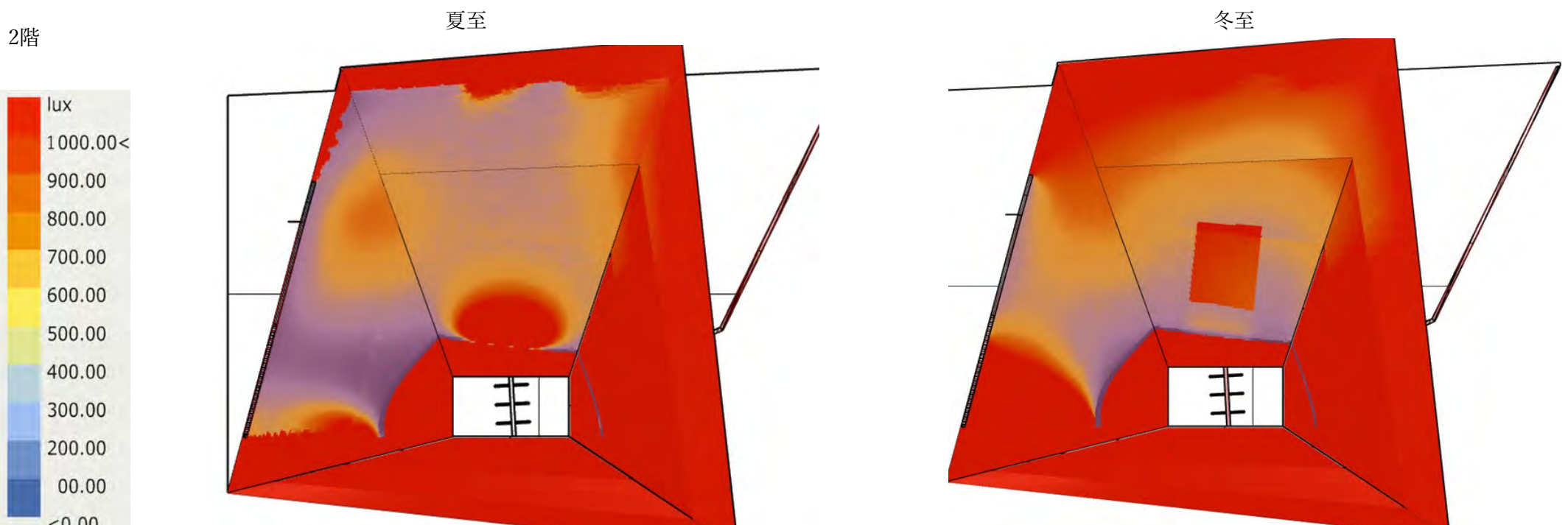
浴室の床や湯船から発生する対流が蒸気や熱を上へ運び、屋根に沿って吹く風の力を利用し、頂部に設けた開口部から効率的に排出する。この仕組みにより、利用者に直接風や蒸気が当たることなく、空間全体を快適に換気できる。



Phase.11: 昼光利用計画

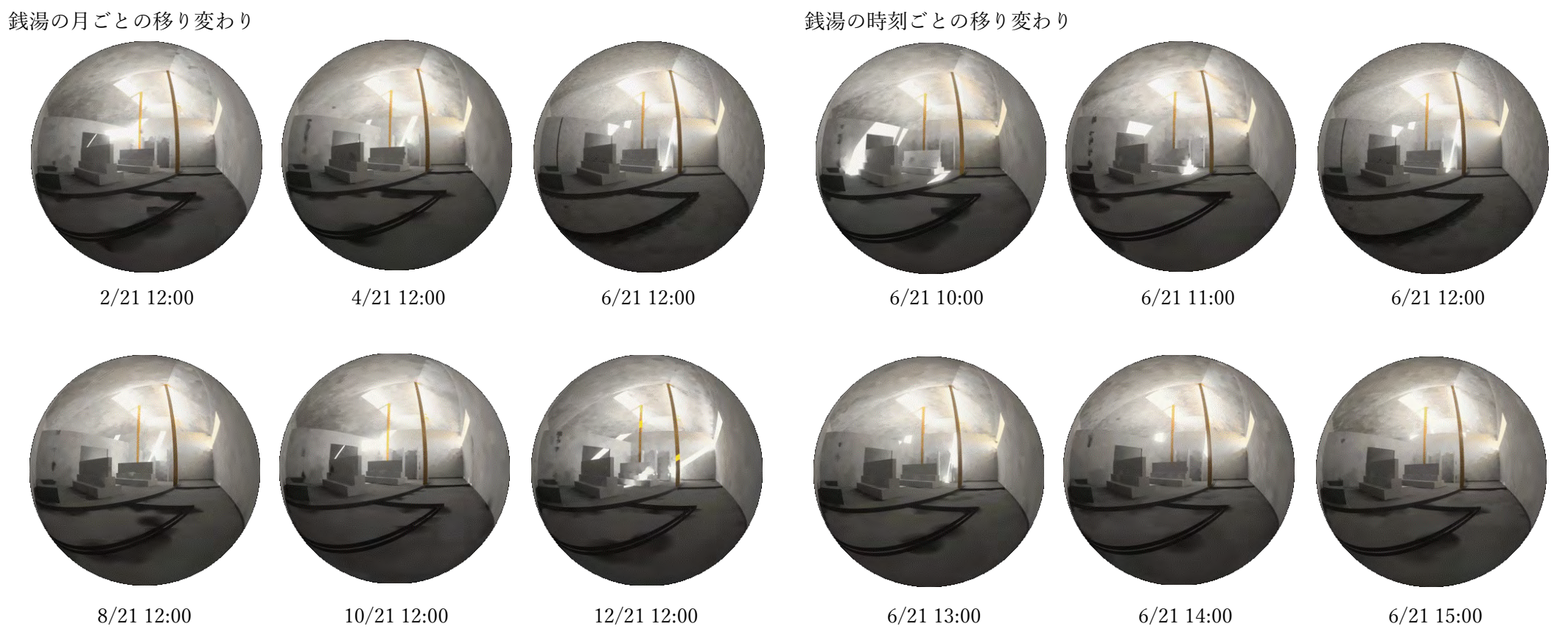
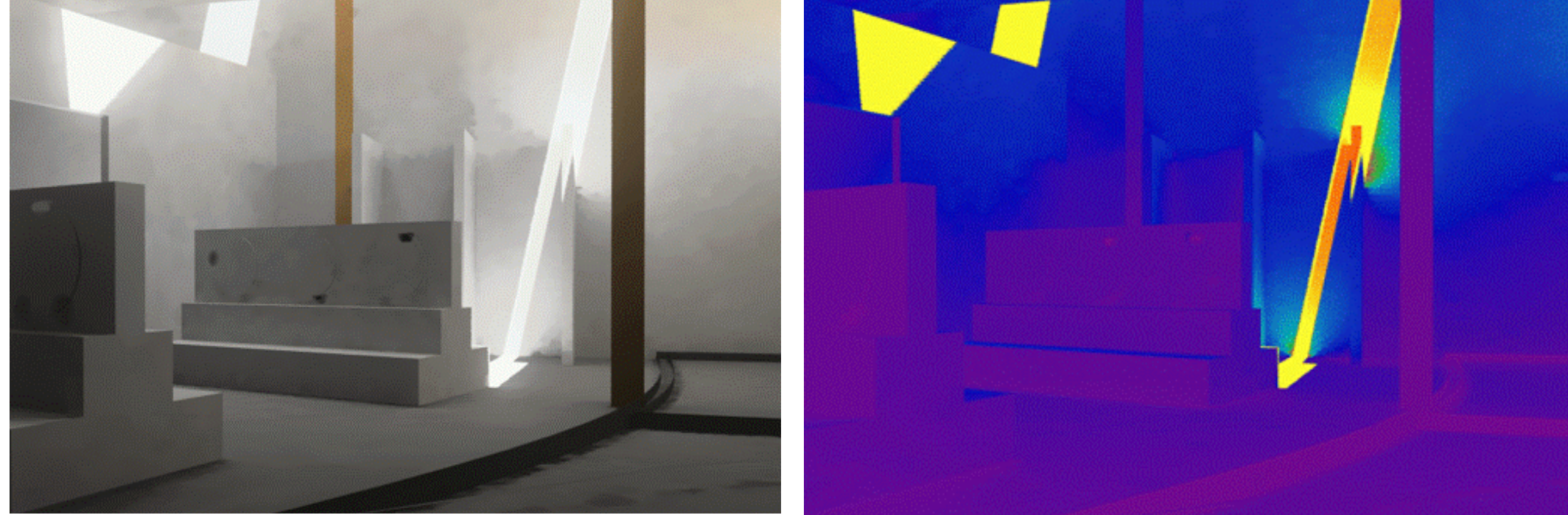


銭湯は天窓から入る光によって明るく、脱衣所前廊下は屋根の開口から入る光によってやさしく照らしている。



Phase.12: 浴室内部に落ちる神秘的な光の筋

銭湯空間の設計においては、壁面に反射したやわらかな間接光によって全体をやさしく包み込むような光環境を基本としている。夏至の正午12~13時の間に、計画的に設けた開口部から自然光が一直線に差し込み、浴場に美しい光の筋が現れる。この光景は1年に1度この日しか見れない。ご来光のように、空間の中に 特別で象徴的な瞬間を生み出し、日常の中に小さな感動をもたらす。



夏至以外の日にちの同じ時刻でも検証した。しっかりと意図したように夏至のみ神秘的な光の差し込みを見ることができる。意図したように12時から13時の間のみ神秘的な光の差し込みを見ることができる。